

「真っ赤な空 見るの怖かった」



被爆者の浜井徳三さん(右)が自身の経験を語った「原爆の語り部 被爆体験者証言の会」＝5日午後、広島市中区

広島のライブハウス 被爆者が証言

73回目となる広島原爆の日を翌日に控えた5日、「原爆の語り部 被爆体験者証言の会」が、広島市中区のライブハウスであった。集まった100人を前に、疎開先から広島市に入り被爆した浜井徳三さん(84)＝廿日市市＝が、原爆投下直後の様子や戦中戦後の暮らしを振り返った。(1面参照)

浜井さんは、現在は平和記念公園となった広島市の旧中島本町で理髪店を営む両親の間に生まれた。原爆投下時は11歳で、両親と兄

姉を亡くしている。

原爆投下時、浜井さんは疎開先の廿日市市の校庭にいた。「青空が光り、ものすごい地響きがした。校舎の窓ガラスが全て割れた」と当時を振り返る。夜になっても広島市方面の空は真っ赤で、見るのが怖かったことを覚えている。

8日に広島市に入るも「実家はペしゃんこになっていた」。家族は見つからず「誰もおらんかった」と祖母に大泣きしたという。戦後、浜井さんは叔父の

家庭で育った。「叔父が『お前にはわしが付いとる』と守ってくれた」と感謝する。ただ、家族がいつか戻ってくるのではとの思いは消えず「私は浜井家の4人の分も生きている」と語った。

中島地区の被爆をテーマに演劇を公演している広島市東区の演劇プロデューサー岩崎さえさん(39)は「昔の中島を知る人は少なく、参考になる。演劇でも原爆の恐ろしさを伝えていければ」と話した。

証言会は、広島市中区でバーを経営していた富恵洋次郎さんが2006年2月に始めた。富恵さんは昨年7月、肺がんのため37歳で亡くなったが、仲間が遺志を継いだ。広島を拠点に活動するシンガー・ソングライターで、富恵さんと親交があったHIPPIYさん(37)は「証言」できる被爆者は少なくなっているが、話してくれる人がいる限り続けたい」と力を込めた。

(桑原大輔)